

「リスボン地震」 第41回

今夏も猛暑、豪雨、台風など、次々災害が起こった。お変わりありませんか。被災された方にはお見舞い申し上げます。

自然災害には、単発的に対応するのではなく、どこでいつ何が起こるかの予想は難しいにしても、必然的に起こるととらえる考え方を確認したい。日生連「日本社会の基本問題」

(1955年)でも9つの課題の筆頭に「災害問題」があげられている。新学習指導要領についても、その視点で、とりわけ東日本大震災の経験をどう踏まえ、活かしているかの点検・批判が必要だ。

この視点には、物的な被害と経済的再建など〈もの〉の面、国家、自治体や学校など人間関係や社会的組織のあり方の〈人〉の面とともに、その事態をどうとらえるか、どうするかといった考え方や世界観などの〈コト〉の面も重要である。

「リスボン地震」は、1755年にポルトガル海



洋帝国の首都リスボンを中心に大きな被害をもたらしたヨーロッパ最大の地震で、18世紀のヨーロッパではフランス革命(1789年)とともに大事件であった」(文献①1頁)。特別寄稿「リスボン地震がヨーロッパ社会に与えた知的影響」(川出良枝)および第5章「リスボン地震がもたらした科学への影響—カントの地震学を中心に—」

(松田曜子)が大変興味深い。ヴォルテール、ルソー、カント、アダム・スミスは、それぞれが大地震と向き合い、神学的考え方自体を乗り越えて自分の思想を形成した。「お説」[最善説]「ごもつともです……しかし、ぼくたちの庭を耕さなければなりません」(文献②459頁)。

(研究部・加藤聡二)

参考文献

- ①(公財)ひよっこ震災記念21世紀研究機構研究調査本部「リスボン地震」その文明的意義の考察(研究調査報告書)「2015年」
www.dfine.jp/updata/isponishin_5083_5083.pdf
- ②ヴォルテール(植田裕次訳)『カンドー』他5篇(岩波文庫)岩波書店、2005年。リスボン地震については285頁以下参照。